

地域との連携による事業展開

～ニホンジカの被害対策～

南信森林管理署 業務第一課長

○ のぐち かずゆき
野口 和幸

伊那市役所 産業振興部農林振興課林務係長

○ しもじま さとし
下島 聡

要旨

ニホンジカによる食害が山麓の農地から高山帯まで広範囲にわたっており、農林業は甚大な被害を受けています。

地域ごとの対策では限界があり、国・県・市町村・大学研究機関・猟友会や地元住民が連携し、様々な垣根を越えた広域的な対策が必要となっています。

このような状況を踏まえ、伊那市や南信森林管理署では「できることからはじめよう！」をチャッチフレーズに様々な対策を展開してきましたので、その概要を紹介します。

はじめに

長野県の第2期特定鳥獣保護管理計画によると、南アルプスに生息するニホンジカは県全体（約6万1千頭）の半数となる3万頭となっており、ニホンジカの行動範囲は標高3,000mの高山帯にまで拡大しています。また、生息密度においても、通常1km²当たり1～2頭であるのに対し、南アルプスでは12.5頭となっており、生息密度は明らかにオーバーしている状態といえます。

生息数の増加等により被害は拡大し、高山植物の食害、自然植生への食圧による林地崩壊の危険性の増加、耕作者の生産意欲減退など地域における深刻な問題となっています。

動物には境界がなく、安全で餌が豊富な地域へと移動しながら生息数を増やしている状況にあることから、広域的な対策を図る必要があります。

このため、行政の枠を超えて広域的に連携協力を行う「南アルプス食害対策協議会」等を設立し、ボランティアの協力を得ながらお花畑の復元、高山帯への防護ネットの設置や南信森林管理署職員自らくりワナによる捕獲を実施しました。



写真-2 昔のお花畑

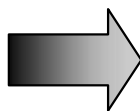


写真-3 今のお花畑



写真-4 食害を受けた高山植物



写真-5 食害を受けた高山植物

1. 南アルプス食害対策協議会での取組

今までも様々な事業を行っていましたが、ニホンジカの食害が広域化していることにより南アルプス食害対策協議会を主軸として、関係機関の英知を結集し、相互に連携する必要性が高まり、行政の枠を越えて広域的に連携協力を行う「南アルプス食害対策協議会」を設立し、個々に活動していた事業を1本化し11団体の各機関が専門分野をカバーしました。以下の5項目について重点的に取り組みを行いました。

- ① シカ防護ネットの設置
- ② 食害に関するシンポジウム
- ③ パネル展の開催
- ④ 猟友会への補助
- ⑤ 被害実態調査

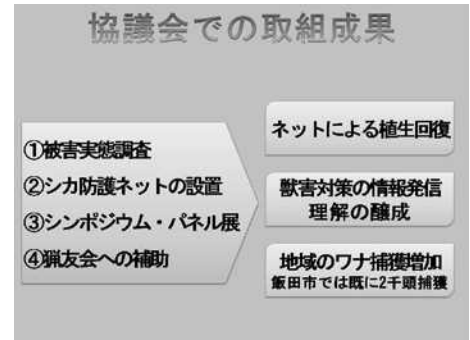


図-1

(2) シカ防護ネットの設置

食害対策協議会設置のきっかけとなった植物を守るために、お花畑へシカ防護ネットを南アルプス協議会と南信森林管理署、ボランティアが一体となり設置しました。

このネットは、人間には異色に見えるオレンジ色のネットですが、南アルプスは希少動物のライチョウが生息しており、動物に視認性の良い色を選定しました。

そして、高山帯という条件もあり、通常国有林内で使用しているフェンスタイプは雪圧により破壊されることが予想されるため最初から除外し、ネットタイプを選定しました。問題は雪圧がどの程度か予想できないため、設置当初は3タイプを設置することとしました。

タイプ① ポール、ネットなどすべての構造物を撤去

タイプ② ポールだけ残し、ネットは撤去

タイプ③ ポール、ネットなどすべての構造物をそのままに残す

20年度の結果は、ネットやロープが原因でポールが折れてしまうということが分かり、21年度は支柱を残したままネットだけを撤去するタイプと、ポールもネットも撤去する2タイプに分け雪圧から防護ネットを守る方式をとっています。



写真-6 シカ防護ネットの設置風景

(2) 食害に関するシンポジウム

信州大学農学部において、「南アルプス食害対策シンポジウム」を様々なテーマで毎年開催しました。

平成20年7月26日に「できることから始めよう！南アルプスの貴重な高山植物保護に向けて」をテーマに3名講師を迎えて講演しました。

『植生から見た赤石山系の特質』

講師 大場達之 (元千葉県立博物館副館長)

『高山植生の復元と高山植物の保全』

講師 土田勝義 (信州大学名誉教授)

『南アルプスを越えるシカ』

講師 泉山茂之 (信州大学農学部 准教授)



写真-7 食害対策シンポジウムの様子

平成20年7月26日

信州大学農学部において、「南アルプス食害対策報告会」と題しシンポジウムを行いました。

『南アルプス食害対策活動報告』 報告者：南アルプス食害対策協議会

『信州大学農学部チームからの報告』 報告者：信州大学農学部竹田謙一准教授他

『(財)自然保護助成基金の取り組み』 報告者：同基金研究員 目代邦康氏

(3) パネル展の開催

伊那市役所の市民ホールを活用して、美しい高山植物の写真や、南アルプスで起こっているニホンジカの食害の実態を知ってもらうために、写真展を開催しました。



写真8 市民ホールでの写真展

(4) 猟友会への補助

所属している市町村を通じて、くくりワナの貸し出しや、補助金の交付を行いました。

(5) 信州大学農学部の取組例

被害の実態調査においては、信州大学農学部へ委託をし、竹田謙一准教授を中心とした4チームにより、ニホンジカの行動調査、植生調査、侵食土砂についての調査、食害による希少昆虫類への影響調査等を行っています。

いままでは、森林被害はあるといわれてきましたが、生息区域がわからないことや、森林被害としての適切な評価がされてきませんでした。これからは、山火事被害などと同様に、被害面積・被害額を算出し、森林被害として適正に評価し、農業等の被害対策との連携も必要と考えます。特に、これらの調査は、経年のデータの蓄積が非常に重要であり、数年の調査を予定しています。そして、全国でも例がない「野生動物対策センター」を設立し、人と野生動物の軋轢に関連する諸問題を解決する人材育成を目的として取り組んでいます。



写真9 GPSを装着したニホンジカ

2. 南信森林管理署の取組

南信森林管理署では、従来から①防護柵の設置、②御柱の森づくり協議会との連携によるバークガードの設置などの対策を行ってきましたが、これらはいわば防衛的な対策でした。

近年、国有林の林地や高山帯への被害が顕著になっていることを踏まえ、南アルプス食害対策協議会への協力・連携を図りながら、職員自ら、ワナ設置による有害獣捕獲を実施することとし、平成19年度に「国有林・有害獣ワナ捕獲チーム」を設置し、このチームを中心に、19年度から試行実施を行い、一定の成果を得たことから20年度以降本格的に実施することとしました。

ワナ捕獲チームは、県地方事務所の区域を単位に首席森林官を地区リーダーに森林事務所に勤務する職員で構成されています。

当初は、3種類のくくりワナを購入し、素人でも安全かつ簡単に設置できるワナを、職員の意見を取り入れながら「笠松式」を選定し、現在は「笠松式」を使用しています。

チーム	19年度	20年度	21年度	合計
諏訪	13	12	(26)35	(26)60
上伊那	13	23	2	24
下伊那		14	9	23
合計		35	(26)46	(26)107

くくりワナによるシカの捕獲頭数(21.1.31日現在)
(カッコは猟友会へワナを貸し出し国有林内で捕獲した頭数)

まとめ

このような、南アルプス食害対策協議会との連携により様々な取り組みが実現してきました。そして、平成21年度には、南北八ヶ岳保護管理運営協議会も設立され、「野生鳥獣との共存に向けた生息環境整備モデル事業」として、南アルプス食害対策協議会のほかに、同じような被害のある八ヶ岳の麦草園地でもシカ防護ネットの取り付けを行い、特に被害調査を通じて、南アルプスと八ヶ岳地域の連携が深まりました。

南アルプス食害対策協議会のように、関係機関が連携し、その取り組みが他の地域に波及し、様々な垣根を越えた広域的な対策を行う体制が、整備できたことが大きな成果と考えており、国有林については、職員の目にみえる地域貢献に繋がっているかと思います。

一番重要な対策は、適切な個体数管理に尽きると思われ、通常は1km四方あたり1頭から2頭、保護優先でも5頭程度にすることが重要かと思われ。そして、猟友会員の減少・高齢化などにより、捕獲技術者が減少する課題について、捕獲技術者の養成は喫緊の対策といえます。課題対策のために協議会と一緒に取り組み、より良い方法をこれからも模索していき、地域を始め関係機関の連携・協力していくことが重要と考えます。

おわりに

この被害対策は、広域的な問題であることの啓発にも繋がるものと考えており、引き続き効果的な対策を実施していくとともに、「生物多様性」・「人間と野生鳥獣との共存」に向けて一役を担えれば幸いです。

写真提供

写真-2 馬の背ヒュッテ

写真-9 信州大学農学部食糧生産学科動物行動管理研究室



図-2